

## 『平家物語』の重盛と 頼朝をめぐつて

博士後期課程三年 塩山貴奈

『平家物語』では、頼朝自身の口から、かつて重盛によって命を救われたのだという過去が語られる。平治の乱の際、頼朝は死罪となるはずだったところを、池禪尼が頼朝助命を嘆願し、重盛が池禪尼の使者として清盛を説得したために、頼朝は命をながらえたという話は、『平治物語』等にもみられるものである。

『平家物語』において、頼朝は、重盛への恩を忘れておらず、ゆえに重盛の息子もおろそかにしないと言う。しかし実際には、小松家への報恩が果たされることはなく、報恩譚としては成立しない。では、『平家物語』が、重盛のおかげで頼朝は死罪を免れたという過去の物語を抱え込むことは何を意味するのか、重盛と頼朝の人物造形のありようから考えてみる。

『平家物語』には、「(大)将軍」の移行という構図がみられること、そして「将軍」とは必ずしも官職と結びつかないものであること等はすでに多く論じられてきた。清盛のあと「将軍」たるべきは重盛であったが、重盛が早世したために、「将軍」の立場は頼朝へと移行してゆく。「将軍」交代劇における重盛から頼朝への流れ、いくなれば両者の連続性と、かつて重盛が頼朝の命を救っていたという物語は、密接に結びつき、響きあうものとして理解されていたので

はなかったか。

従来から指摘されるとおり、『平家物語』の重盛は、未来を予見する人として描かれている。平家一門が滅亡し、頼朝の世となつてみれば、そうした重盛が頼朝を救っていたのだという過去の出来事は、重盛から頼朝への「将軍」の移行という未来を暗示する事件にほかならなかっただろう。「将軍」頼朝の世の到来の必然性を示す物語としての意味を持ったと思われるのである。

『平家物語』がこうした歴史叙述を必要とした背景には、『平家物語』における宗盛や頼朝の描かれ方も考えねばなるまい。『平家物語』は小松家の断絶を平家の滅亡とし、重盛と頼朝のつながりを強調するが、頼朝の時代は、宗盛率いる平氏政権に続くかたちではじまったのであったし、また、勅勘の身であつた頼朝が平家一門を討ち、源氏の中でほかならぬ頼朝が次なる「将軍」となることは、その正当性の説明が求められるものでもあった。こうした点からも、重盛と頼朝の関係性を強調し、頼朝が新たな「将軍」となることの必然性を保証する物語が必要とされていたと考えられる。